

第3章 帰省する地域外家族による
私用空間の利用管理の実態

3-1 はじめに

(1) 本章の目的

本章では、家族社会による農地の利用管理に着目する。労働の担い手である若年層の流出や兼業化などの影響により、次第に家産である耕作放棄や遊休農地の増加などの環境管理問題が顕在化してきた。しかし、農山村を離れた家族は今日、帰省を兼ねて農作業を手伝うなど緩やかに家族のつながりを保っている。本章では、このように集落外に住む家族や親類と農家との関係に着目することとする。

ところで、現代では農家の就業構造が多様化していることから農家のライフステージによって、その労働の仕方も異なると考えられる。これに伴い、農家のライフステージに対応して、集落外に住む家族や親類の労働力が、農家の低下した労働力を補っているとも考えられる。

本章では、農地の利用管理の実態として、地域外家族による農作業の労働力について農家の年齢分類ごとの特徴を明らかにし、地域外家族の労働支援の必要性を抽出することを目的とする。

(2) 本章で用いる用語の定義

1) 地域外家族

農家の世帯主の子とその家族、きょうだいとその家族、配偶者のきょうだいとその家族のうち、対象地に居住せず調査日から過去一年の間に対象地で農作業をおこなった者とする。

2) 労働力

農家の農業従事者および地域外家族が農作業を行った延べ日数とする。(単位：人・日)

3) 平均日数

一人あたりの労働力とする。(単位：日)

4) 潜在的耕作放棄地

地域外家族による農作業の労働力が無かったと仮定した場合に耕作放棄される可能性のある農地をとする。

(3) 調査分析の枠組みと方法

調査の概要を表 3-1 に示す。

表 3-1 調査の概要

概要		内容
対象者	対象地の農家58戸*の世帯主	1.対象者の世帯について 家族構成、職業、所有している農地の面積と位置、各農作業にける日数、地域外家族の有無 2.地域外家族について 世帯主との続柄、年齢、性別、居住地、職業、対象地で行なった農作業と日数 3.地域外家族による労働力に対する評価 地域外家族による労働力の量、質の満足度について、それぞれ5段階評価と理由 4.地域外家族の農作業が無いと仮定した場合 代替労働主体の有無と代替労働主体、潜在的耕作放棄地の有無および面積、位置
調査方法	直接訪問によりアンケート用紙を配付、留置、後日に訪問し回収した。	
配付期間	2002年10月2日～3日	
回収期間	2002年10月4日～6日	
有効回答数	51(87.9%)	

*対象地の住民への聞き取りから、アンケートへの回答が可能と見込まれた世帯主

分析の方法としては、農家と地域外家族の年齢分類を行ない、それぞれが対象地で行う農作業¹⁾の労働力と平均日数を分析の指標として取り上げる。なお、農家の年齢分類の間の比較を行うために、単位面積当たりの農作業の労働力と平均日数を扱う。また、対象地の主な農地は水田とりんごの果樹園である。機械化の進んでいる水田と、主な作業を手作業で行う果樹園とについてそれぞれ分析を進める。

本章の構成として、まず農家と地域外家族について年齢分類を行なう。次に、農家の年齢分類ごとに農家と地域外家族の労働力の特徴を明らかにする。また、地域外家族による労働力の農家による評価を農家の年齢分類ごとに明らかにする。さらに、地域外家族による農作業が無い場合を仮定した質問による調査から、農家にとっての地域外家族の労働支援主体²⁾としての必要性、および耕作を続ける上での必要性を明らかにする。以上から、農地の維持の実態として、「居住地の変更を伴わない移動」をする地域外家族による農作業の労働力について農家の年齢分類ごとの特徴を明らかにし、地域外家族の重要性を抽出する。

(4) 対象地の概要

本章の対象地である長野県長野市信更町赤田区は、農林業センサスによる 2000 年の農地面積が 52.90ha であり、田が 14.99ha、畑が 4.86ha、果樹園が 33.05ha、と果樹園の面積が大きい。耕作放棄地面積は 7.53ha である。人口と耕作放棄地面積の推移を図 3-3 に示す。

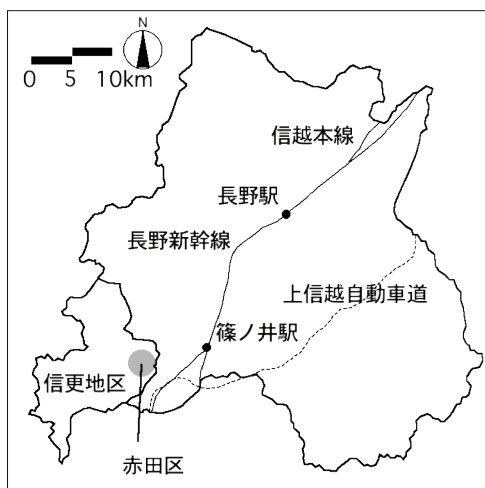
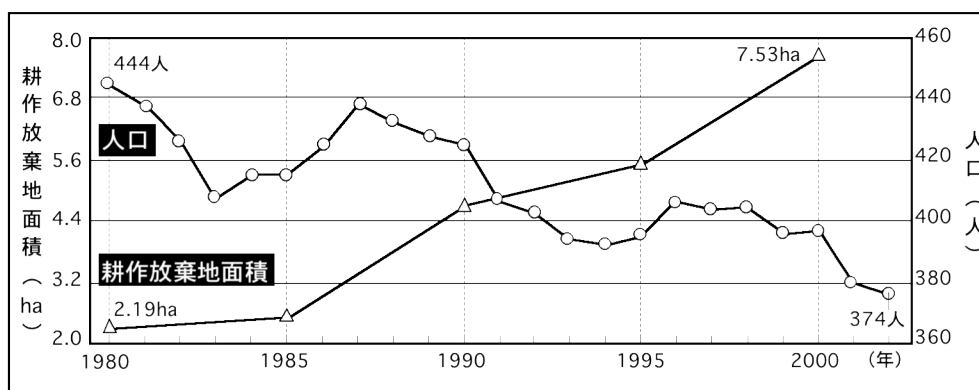


図 3-2 赤田区の位置図



赤田区内には児童福祉施設があり、その児童数が人口としてカウントされている。そのため、年度ごとに住民基本台帳（4月1日現在）の人口から児童数を除いて算出した。耕作放棄地面積は農業センサスのデータを用いた。

図 3-3 赤田区の人口及び耕作放棄地面積の推移

3-2 農家と地域外家族の年齢分類

本章では、調査で得られた農家と地域外家族をそれぞれ年齢によって分類し、それぞれの年齢分類での農家と地域外家族の関係を示す。

(1) 農家の年齢分類

1) 農家の居住者および農業従事者の年齢別人口

有効回答の得られた 51 戸の農家について、農家における居住者および農業従事者の年齢別人口を図 3-4 に示す。居住者の人口は 187 人（男：女=93：94）、農業従事者の人口は 90 人（男：女=40：50）であった。

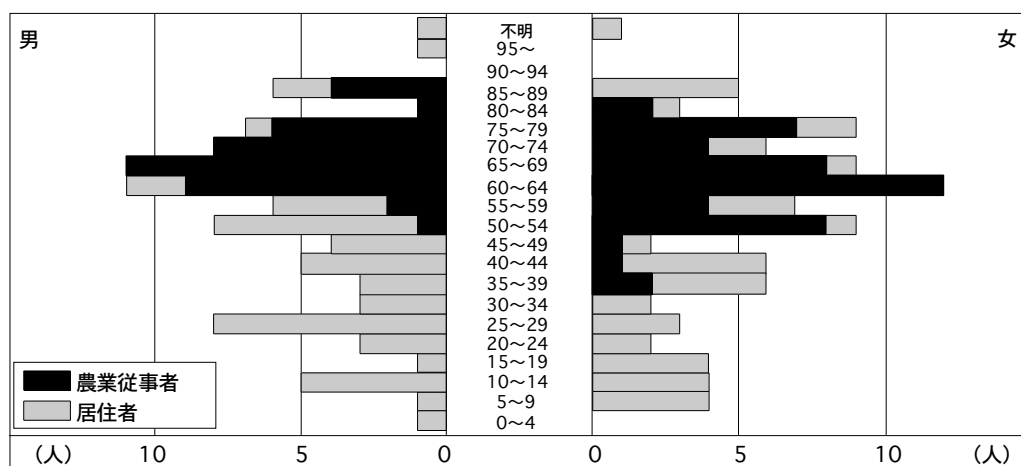


図 3-4 居住者および農業従事者の 5 歳階級別人口

農業従事者についてみると、男性は 50 歳代以上、女性は 30 歳代後半以上である。また、男性は 60 歳代から、女性は 50 歳代から増え、その年代の居住者のうちのほとんどが農業従事者であることが分かる。女性は男性より若い世代が農業に関わっている。

2) 地域外家族の有無

農家の特徴を地域外家族の有無別に表 3-5 に示す。51 戸中 31 戸の農家に地域外家族がいる。地域外家族のいない農家の方が 1 戸当たり農業従事者数は若干多く、農業従事者の平均年齢も若干若い。また、農業従事者数別戸数を見ると 1 人の農家の約 7 割に地域外家族がいることがわかる。

表 3-5 地域外家族にみる有無別の農家の特徴

	農家戸数	農業従事者人数			1戸当たり農業従事者数	農業従事者の平均年齢	農業従事者数別戸数				平均農地面積 (ha)	
		合計	男	女			1人	2人	3人	4人	水田	果樹園
地域外家族のいる農家	31	53	25	28	1.71	66.1	13	15	2	1	0.26	0.52
地域外家族のいない農家	20	37	15	22	1.85	64.9	5	13	2	0	0.20	0.54

3) 農家の年齢分類ごとの特徴

以下では、地域外家族のいる 31 戸の農家を対象として分析をすすめる。各農家の農業従事者の平均年齢によって農家を「若年農家」「中年農家」「高年農家」の 3 つに分類した(図 3-6)。

年齢分類ごとの農地面積の内訳をみると、水田、果樹園とも大半を中年農家が占めていることが分かる。(図 3-7)

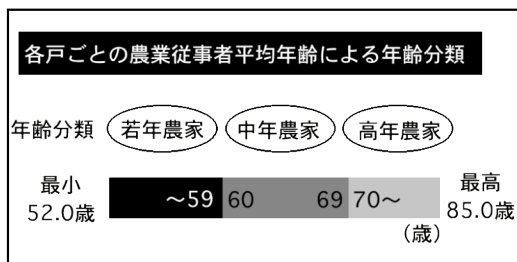


図 3-6 農家の年齢分類

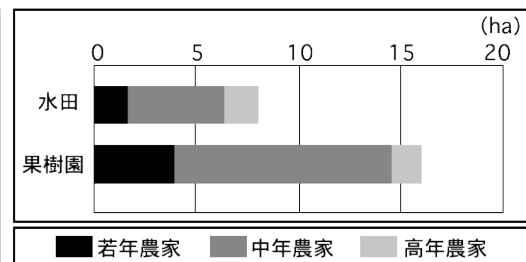


図 3-7 年齢分類にみる農地面積の内訳

年齢分類ごとの農家の特徴を表 3-8 に示す。若年農家の農業従事者は女性が多く、農業従事者数 1 人の農家が多い。中年農家の農業従事者は男女がほぼ半々で農業従事者数は 2 人の農家がほとんどであり、1 戸当たりの 2 人以上と農業従事者数が最も多い。平均農地面積は水田、果樹園ともに年齢分類の中で最も大きい。高年農家の農業従事者は男性が多く、農業従事者数は 1 人の農家が多い。また、1 戸当たりの農業従事者数が最も少ない。平均農地面積は水田、果樹園ともに年齢分類の中で最も小さい。

表 3-8 年齢分類毎の農家の特徴

	農家戸数	農業従事者数			農業従事者数別戸数				1戸当たり農業従事者数	平均農地面積(ha)	
		合計	男	女	1人	2人	3人	4人		水田	果樹園
若年農家	7	10	3	7	5	1	1	0	1.4	0.23	0.57
中年農家	15	31	14	17	2	11	1	1	2.1	0.31	0.71
高年農家	9	12	8	4	6	3	0	0	1.3	0.19	0.17

(2) 地域外家族の年齢分類

1) 地域外家族の年齢別人口

31 戸の農家から地域外家族 74 人についての回答が得られ、72 人（男：女=37：35）についての有効回答が得られた。

地域外家族の年齢別人口を図 3-9 に示す。男性では 30 歳代後半が最も多く、40～50 歳代前半でいったん減るものの 50 歳代後半から 60 歳代にかけて増える。また、20 歳代後半も多い。女性では 60 歳代が最も多い。男性に比べて 30 歳代以下が少ない。

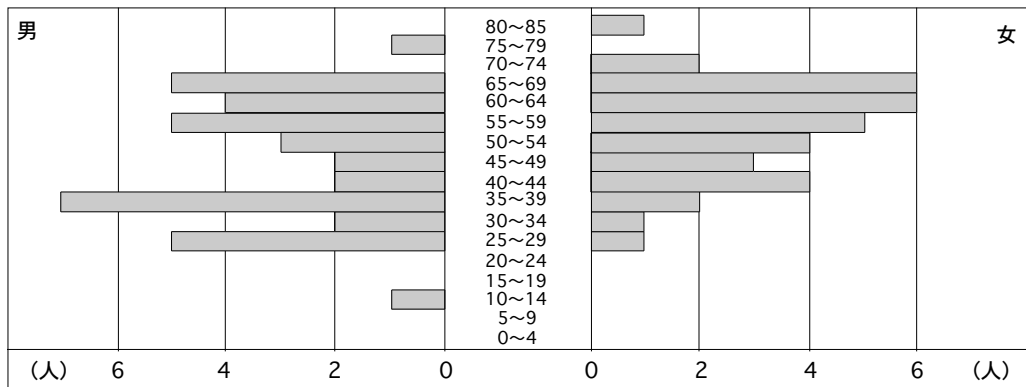


図 3-9 地域外家族の 5 歳階級別人口

2) 地域外家族の年齢分類

地域外家族を年齢によって 4 つに分類した⁴⁾。50 歳未満の「青年家族」には、10 歳代から 40 歳代の地域外家族が含まれるが、これらは農家の子とその家族であり、ほぼ子育てと仕事を抱える年代であることから同じ年齢分類とした。50 歳以上 60 歳未満の「若年家族」は、子育てが終わったが定年退職前と言う年代である。60 歳以上 70 歳未満の「中年家族」は定年退職を迎えた年代である。また、70 歳以上を「高年家族」とした。(図 3-10)

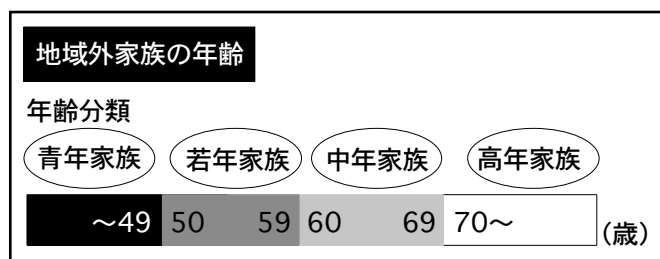


図 3-10 地域外家族の年齢分類

また、地域外家族の職業は大きく、「勤め」「農業」「無職」の3つに分類でき、その他、学生や自営業などもみられた。

3) 農家の年齢分類ごとにみた地域外家族の特徴

農家の年齢分類ごとに、地域外家族の年齢分類ごとの農家との続柄や職業、居住地⁴⁾を表 3-11 に示す。

表 3-11 農家の年齢分類毎にみた地域外家族の特徴

		人数			続柄*			職業				居住地		1戸当たりの人数
		合計	男	女	子	夫	妻	勤め	農業	無職	その他	市内	市外	
若年農家	青年家族	5	3	2	4	-	1	5	-	-	-	2	3	0.71
	若年家族	2	0	2	-	1	1	1	-	-	1	2	-	0.29
	中年家族	6	2	4	-	1【1】	5【1】	-	1	5	-	3	3	0.86
	高年家族	1	0	1	-	1【1】	-	-	-	1	-	1	-	0.14
	合計	14	5	9	4	3	7	6	1	6	1	8	6	2.00
中年農家	青年家族	18	11	7	18【7】	-	-	12	-	2	4	12	6	1.20
	若年家族	10	5	5	-	5	5【1】	5	1	2	2	8	2	0.67
	中年家族	10	4	6	2【2】	6【2】	2【1】	-	4	5	1	7	3	0.67
	高年家族	3	1	2	-	3	-	-	2	-	1	3	-	0.20
	合計	41	21	20	20	14	7	17	7	9	8	30	11	2.73
高年農家	青年家族	7	5	2	7【4】	-	-	3	-	3	1	-	7	0.78
	若年家族	5	3	2	5【1】	-	-	4	-	-	1	2	3	0.56
	中年家族	5	3	2	1【1】	-	4【2】	-	-	5	-	-	5	0.56
	合計	17	11	6	13	-	4	7	-	8	2	2	15	1.89

*子：子とその家族、夫：夫のきょうだいとその家族、妻：妻のきょうだいとその家族を表し、その人数のうち、本人以外（配偶者、配偶者の親、子を含む）の人数を【】内に示す。

■ 農家の年齢分類ごとに、地域外家族の年齢分類について2番目までに多い特徴的な属性に網みを付けた。

若年農家には妻のきょうだいで主婦などの無職である中年家族が最も多く、次いで子である青年家族が多い。中年農家には青年家族が最も多く、全員が子とその家族で勤めが多い。また、他の年齢分類の農家の地域外家族に比べ、職業に農業が多

く、居住地に市内が多いことが特徴である。高年農家にも青年家族が最も多く、全員が子とその家族であり、勤めと無職が同数ずついる。次いで、若年家族、中年家族が同数ずつ続く。また、居住地に市外が多いのが特徴である。

(3) 農家と地域外家族の関係

以上の傾向から読みとれる、農家と地域外家族の関係をモデル的に図 3-12 に示し、農家の年齢分類毎にみていく。

若年農家では妻が一人で農業を行っていることが多い。そのため地域外家族には中年家族である妻のきょうだいが多く、特に主婦を含む無職が多い。中年農家では夫婦で農業を行っていることが多い。そのため地域外家族には夫または妻のきょうだいとその家族が多い。高年農家では夫が一人で農業を行っていることが多いが、地域外家族には夫のきょうだいは無く妻のきょうだいが多い。

なお、どの年齢分類でも、農家の子である青年家族は比較的多い。特に中年農家と高年農家の地域外家族には農家の孫も含まれており、次の世代も農作業をおこなっている。

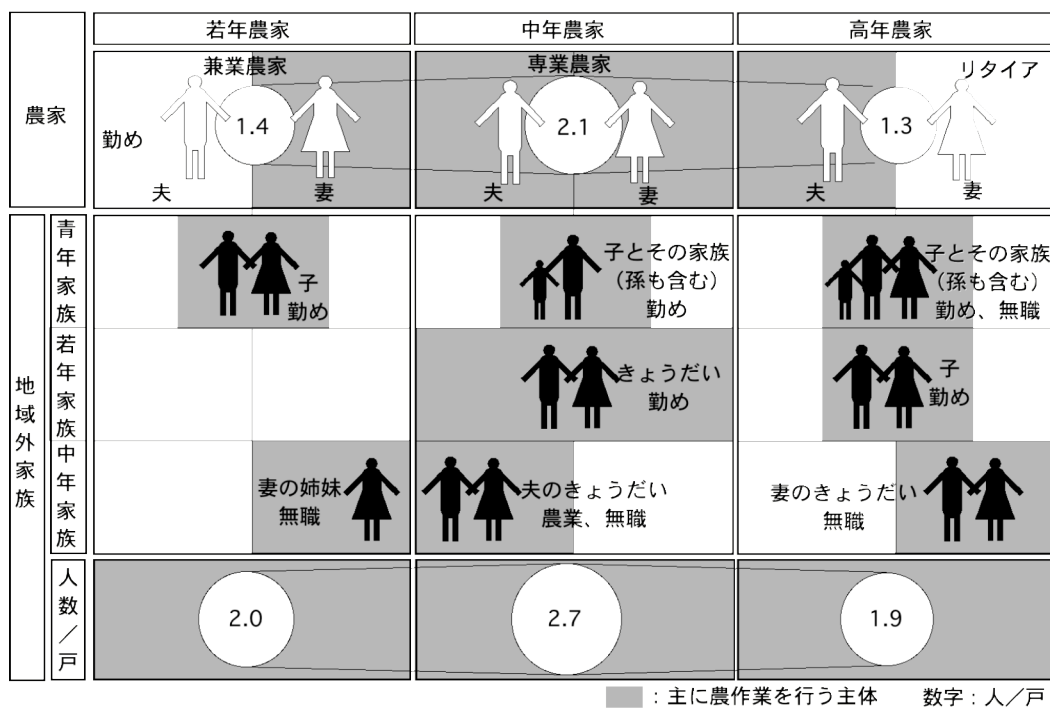


図 3-12 農家と地域外家族の関係

3-3 農家の年齢分類ごとにみた労働力の特徴

(1) 農家と地域外家族の労働力

ここでは農家および地域外家族の労働力などの、農家の年齢分類による違いを明らかにする。なお、高年家族の労働力はごく少ないため、ここでは分析の対象としない。

1) 労働力の合計と地域外家族の労働力の割合

水田と果樹園それぞれについて、一年間にかかる単位面積当たりの労働力と地域外家族の労働力の割合を図 3-13 に示す。水田では、労働力の合計をみると中・高年農家に比べて若年農家が少なく 60%程度である。地域外家族の労働力は、年齢分類間で大きな違いはない。果樹園では、労働力の合計をみると年齢分類によってほとんど変わらないが、農家の年齢が上がる程、地域外家族の労働力の割合が高くなることわかる。

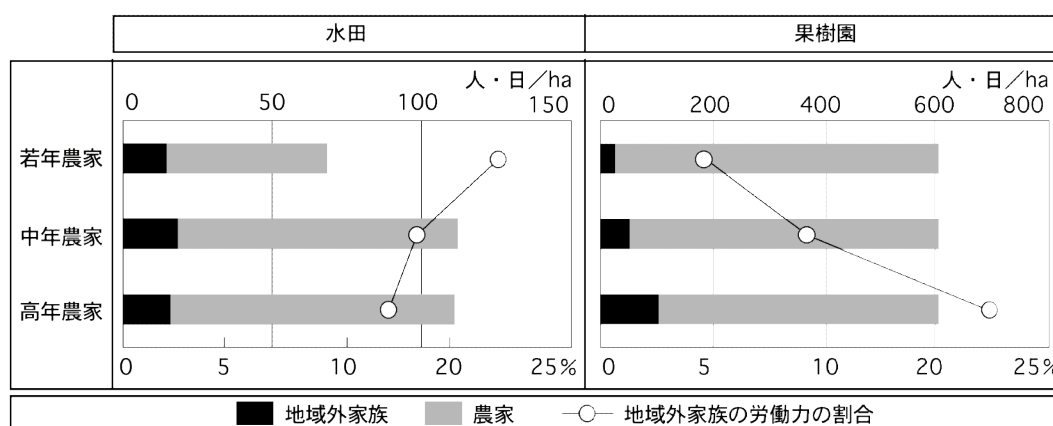


図 3-13 単位面積あたりの労働力と地域外家族の労働力の割合

2) 平均日数

単位面積当たりの平均日数を図 3-14 に示し、年齢分類間の比較を通して、それぞれの特徴を述べる。

若年農家では、果樹園で農家の平均日数が最も長いことが特徴的である。中年農家は水田、果樹園の両方で農家、地域外家族とも平均日数がそれぞれ最も短い。高

年農家は、水田、果樹園の両方で農家の平均日数が比較的長く、地域外家族の平均日数が果樹園で最も長いことが特徴的である。

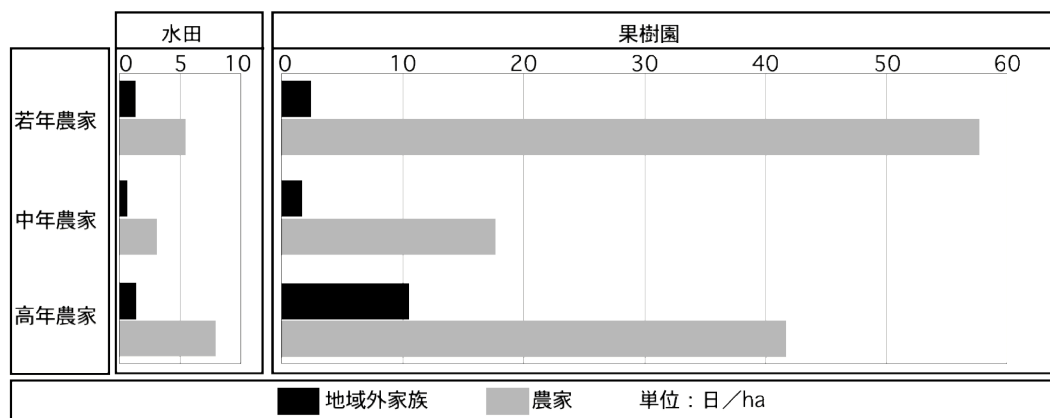


図 3-14 単位面積当たりの平均日数

3) 作業内容別の労働力

次に、作業内容別の労働力とそれに占める地域外家族の労働力の割合を図 3-15 に示す。

どの年齢分類の農家も、水田では最も労働力のかかる「草刈り」を農家がほとんどを行ない、短時間で終わらせる必要のある「刈入れ」「脱穀」に地域外家族の労働力が集中する。果樹園では「摘花・摘果」「葉摘み・玉回し」「収穫」など労働力のかかる農作業に地域外家族の労働力が集まっている。また、水田、果樹園ともに農家の年齢分類が上がる程、秋の収穫時期の農作業よりも春の農作業に労働力をかけ、地域外家族の労働力の割合も高くなる⁵⁾。

若年農家では、水田で「草刈り」に次いで、「刈入れ」「脱穀」に労働力をかけ地域外家族の労働力も高い。地域外家族の労働力の割合は 60%前後である。果樹園では地域外家族は主に「摘花・摘果」「葉摘み・玉回し」「収穫」を行なっている。

中年農家では、水田で「草刈り」に次いで、「刈入れ」「脱穀」に労働力をかける。地域外家族の労働力の割合は「刈入れ」「脱穀」では 30%前後である。また「田植え」では 15%弱となる。果樹園では、地域外家族の労働力の割合は若年農家に比べ高くなり、特に「摘花・摘果」と「収穫」で 10%強である。

高年農家では、水田で「草刈り」に、次いで「田起こし」「農薬散布」に労働力をかける。地域外家族の労働力は「田植え」で高く、労働力の割合は 50%弱と高い。

果樹園では、農家の労働力は「剪定」「摘花・摘果」が高くなる。地域外家族の労働力は「草刈り」が高く、労働力の割合は 35%前後と高い。また高年農家の地域外家族のみが「剪定」を行っており、他の年齢分類の農家に比べ、地域外家族が多くの作業内容を行なっている。

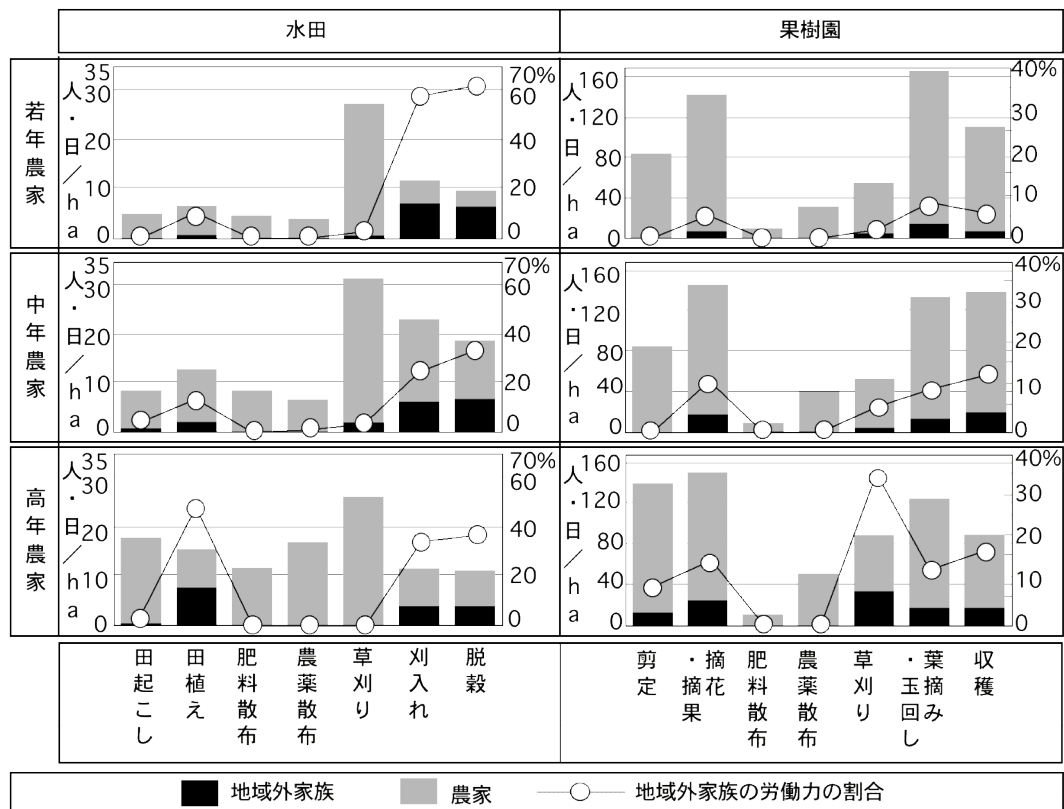


図 3-15 作業内容別の労働力とそれに占める地域外家族の労働力の割合

(2) 地域外家族の年齢分類ごとの労働力

ここでは農家の年齢分類ごとに、地域外家族の年齢分類ごとの労働力の違いを明らかにする。

1) 労働力の割合

地域外家族の年齢分類ごとの労働力の割合を図 3-16 に示す。

どの年齢分類の農家も共通して、若年家族と中年家族の労働力の割合が水田より果樹園で高く、青年家族の労働力の割合が水田より果樹園で低い。

若年農家では、水田、果樹園ともに中年家族の割合が高い。中年農家では、水田、果樹園ともに青年家族の割合が高い。高年農家では、水田は青年家族の割合が高く、果樹園では中年家族、次いで若年家族の割合が高い。

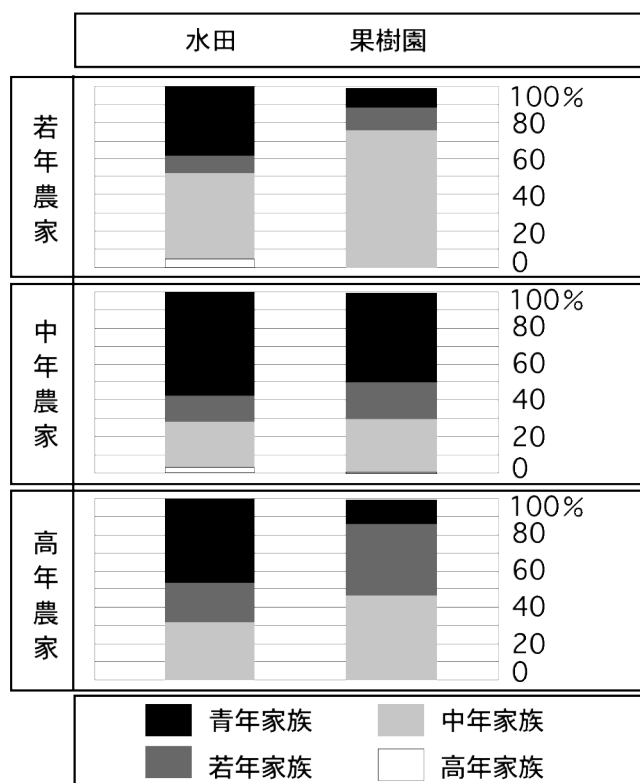


図 3-16 地域外家族の年齢分類毎にみた労働力の割合

2) 平均日数と人数

若年農家では、青年家族は果樹園より水田で平均日数も人数も多い。若年家族と中年家族は水田より果樹園で平均日数も人数も多い。中年農家では、高年家族を除くどの年齢分類の地域外家族も、水田より果樹園で、平均日数も人数も多くなる。高年農家では、青年家族は水田では人数が最も多いが平均日数は短く、果樹園では水田より人数が減り平均日数が長くなる。若年家族と中年家族は水田より果樹園で平均日数が極端に長くなる。

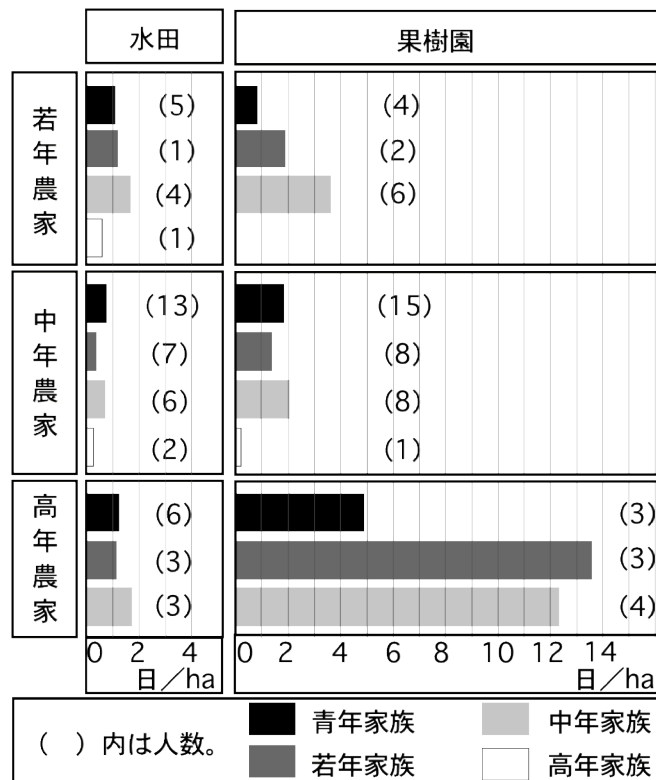


図 3-17 地域外家族の年齢分類毎にみた人数と平均日数

3) 作業内容別の労働力

作業内容別の労働力を図 3-18 に示す。

若年農家では、地域外家族は水田で「刈入れ」「脱穀」を主に行なうが、内訳は中年家族、次いで青年家族が多い。果樹園では「摘花・摘果」「葉摘み・玉回し」のほとんどを中年家族が行っている。

中年農家では、水田で「田起こし」「田植え」「草刈り」を主に青年家族が行い、青年家族を中心に「刈入れ」「脱穀」を各年齢分類の地域外家族が行なう。果樹園で「草刈り」を青年家族のみが行い、青年家族を中心に「摘花・摘果」「葉摘み・玉回し」「収穫」を各年齢分類の地域外家族が行なう。

高年農家では、水田は「田植え」を中年家族と青年家族が行い、「刈入れ」「脱穀」は若年家族と青年家族が行なう。果樹園は「剪定」「摘花・摘果」「葉摘み・玉回し」「収穫」を主に中年家族が行ない、「草刈り」を若年家族が行なう。

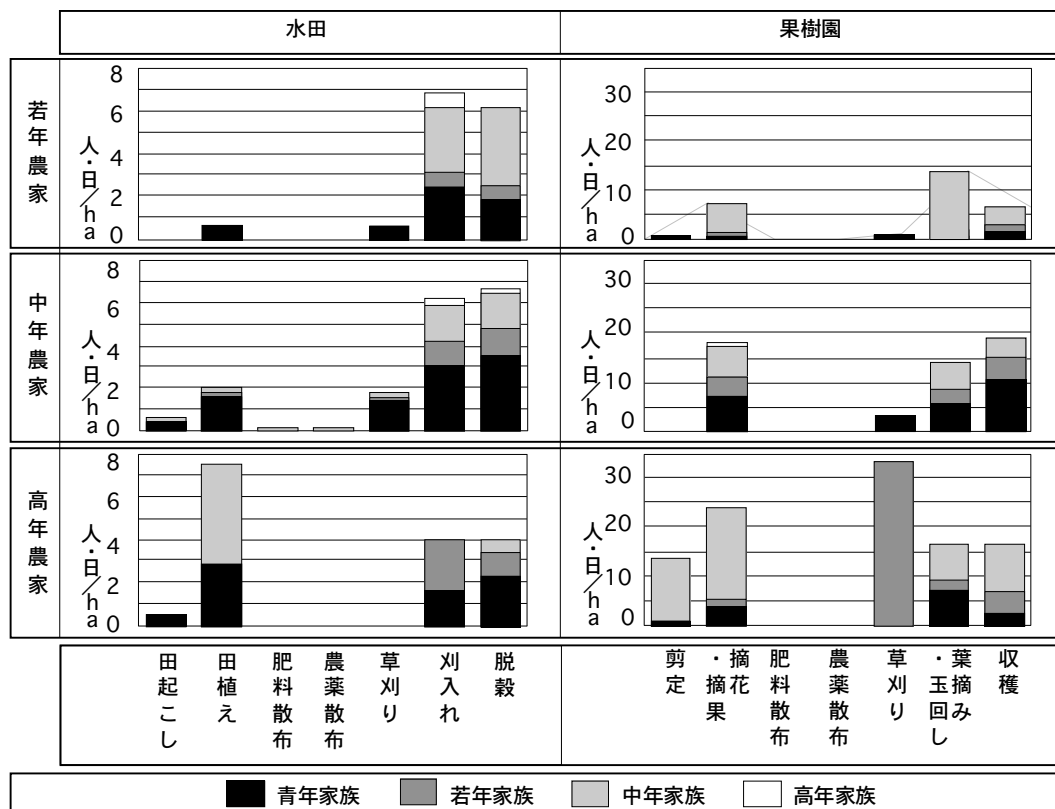


図 3-18 地域外家族の年齢分類毎にみた作業内容別の労働力

(3) 小括

以上から、単位面積当たりの労働力について、農家の年齢分類ごとに明らかになったことをまとめる。

1) 若年農家

若年農家では、水田にあまり労働力をかけず、そのうちの地域外家族の労働力が占める割合が大きい。短時間で終わらせる必要のある収穫に、中年家族と青年家族の労働力が集まる。一方、果樹園では、地域外家族の労働力はほとんどなく、農家の負担が大きいと言える。

2) 中年農家

中年農家では、青年家族を中心に各年代の労働力が春と秋の農繁期に集まることによって、労働力のかかる農作業も短時間で行うことができると言える。

3) 高年農家

高年農家では、水田では地域外家族が春の農作業に多く労働力をかけている。特に「田植え」では地域外家族の労働力が約半分を占め、中年家族が比較的長時間かけて行なう。逆に、収穫時期の農作業を若年家族と青年家族が短時間で行なう。果樹園では地域外家族が行なう作業内容が多く、労働力の割合も大きい。特に若年家族と中年家族が長時間かけて行なう。農家の体力が低下しており、農作業が長時間になるが、それを補うため地域外家族がその年齢分類によって役割分担を行なっていると考えられる。

3-4 地域外家族の労働力に対する農家の評価

(1) 労働力の量について

農家に、地域外家族の労働力についてその量の満足度⁶⁾を5段階で評価させた。量に対する満足度と理由を図3-19に示す。

全ての年齢分類の農家も水田より果樹園で満足度が低い。

若年農家は水田、果樹園とも最も満足度が低く、特に果樹園では+0.1と低い。水田では、満足（「非常に満足」か「どちらかという満足」）の理由として、必要な時に労働力が得られること、不満（「非常に不満」か「どちらかという不満」）の理由として、人数の不足が挙げられた。果樹園では不満の理由として、日数が短く品質が落ちることや、長時間頼みたくても地域外家族の都合を気にしていることなどが多く挙げられた。

中年農家は水田、果樹園とも同程度の満足度を示し、比較的高い。満足の理由として必要な時に労働力が得られること、不満の理由として体力低下を地域外家族が補い切れていないことが挙げられた。

高年農家は水田で最も満足度が高く、果樹園も比較的高い。満足の理由として、地域外家族が農作業を行なう頻度が高いことが挙げられ、平均日数が長いことがわかる。

また、労働力の量の増加を希望する⁷⁾農家の割合を図3-20に示す。若年農家では70%強であるのに対し、中・高年農家では20%に留まっており、ほぼ現状に満足していると言える。希望理由には、若年農家では自分の時間の創出、品質の向上を望むものがあつた。中・高年農家では体力低下の補いが主な理由である。

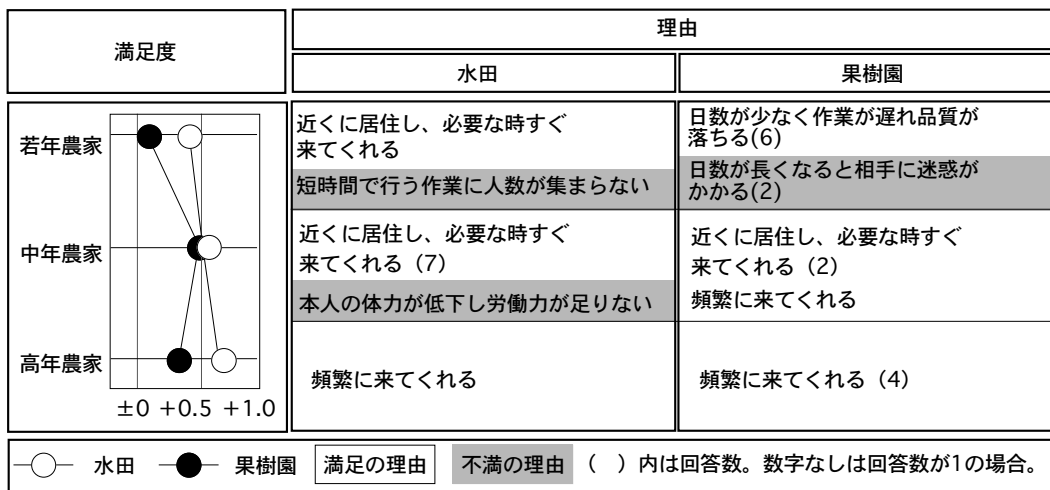


図 3-19 地域外家族の労働力の量に対する農家による満足度とその理由

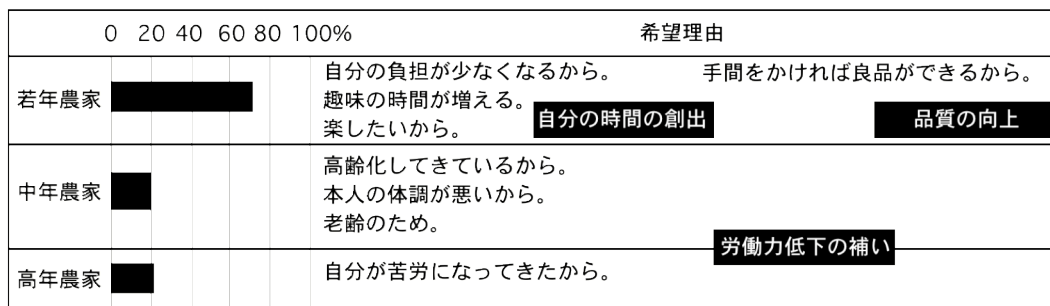


図 3-20 地域外家族の労働力の量の増加を希望する農家の割合

(2) 労働力の質について

地域外家族の労働力についてその質の満足度⁸⁾についても、同様の調査を行なった。質に対する満足度と理由を図 3-21 に示す。全ての年齢分類の農家で水田より果樹園で満足度が低いが、+0.5 以上であり全体的に満足度は高いと言える。

若年農家は、水田で最も満足度が高く、満足の理由として技術の必要ない農作業のみを地域外家族に行なってもらうため質には問題がないことが挙げた。果樹園では満足度は比較的低いと言え、満足の理由は水田と同様であるが、不満の理由として地域外家族が農作業を行なうと品質が落ちることが多く挙げた。

中年農家は、水田では若年農家より満足度が低くなるが、満足の理由として地域外家族が継続的に農作業を行うため要領を得ていることが特に多く挙げた。不満の理由として、手際の悪さが挙げた。果樹園では満足度が最も高く、満足の理由は水田と同様であるが、不満の理由として地域外家族が農作業を行なうと品質が落ちることが挙げた。

高年家族は、水田、果樹園とも最も満足度が低い。満足の理由としては「来てくれるだけで助かるので質にはこだわらない」というものが挙げた。

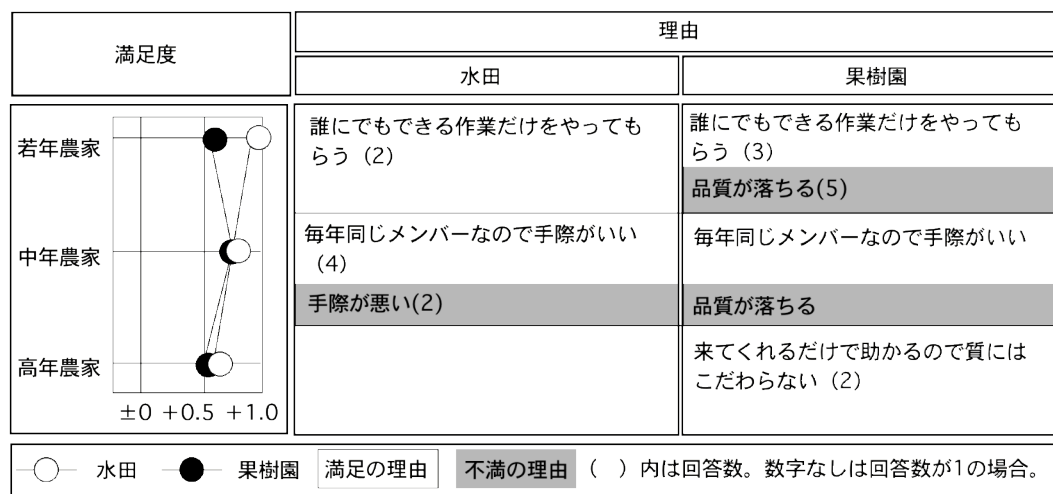


図 3-21 地域外家族の労働力の質に対する農家による満足度とその理由

(3) 小括

以上から、農家が地域外家族の農作業をどのように評価しているのかをまとめる。

1) 若年農家—自分の時間づくりのための労働力—

若年農家では、地域外家族が農作業を行なうと品質が落ちるため、地域外家族には簡単な作業のみを行なってもらう。全体的にみれば、自分の時間づくりのために大半の農家が量の増加を希望しており、そのための労働力と評価していると言える。

2) 中年農家—慣れ親しんだ良質の労働力—

中年農家では、地域外家族の労働力をタイミングよく得られ、また地域外家族が継続的に農作業を行なっているため要領を得ていると評価していることから、慣れ親しんだ良質の労働力と評価していると言える。

3) 高年農家—体力の低下を補う貴重な労働力—

高年農家では、前節で明らかになった地域外家族の平均日数の長さが、量の満足度の高さにつながっていると言える。自らの体力が低下しており、体力の低下を補う労働力と評価していると言える。

3-5 地域外家族の必要性

地域外家族がない場合を仮定した質問⁹⁾による調査から、地域外家族の労働支援主体としての必要性と、農地の耕作を続ける上での必要性を明らかにする。

(1) 労働支援主体としての必要性

1) 代替労働支援主体の有無

代替労働主体の有無の割合を図 3-22 に示す。水田、果樹園ともに農家の年齢が上がる程、代替労働支援主体を「有り」とする割合が低くなる。特に果樹園では高年農家は全農家が代替労働支援主体を「無し」とした。

また「有り」の場合の代替労働主体を図 3-23 に示す。若年農家では個人的なつながりの「友人」が多く、中年農家では「友人」と地縁的なつながりの「近所の人」が半々である。高年農家は「農協」という回答が1つである。

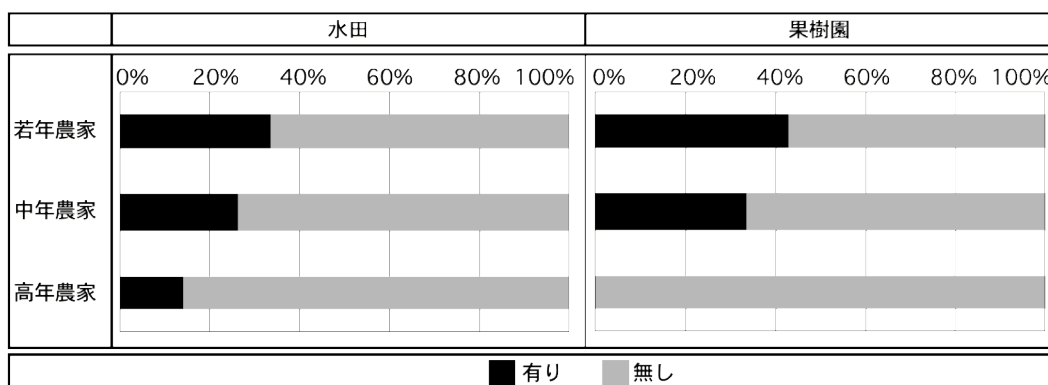


図 3-22 農家の年齢分類毎にみた代替労働支援主体の有無

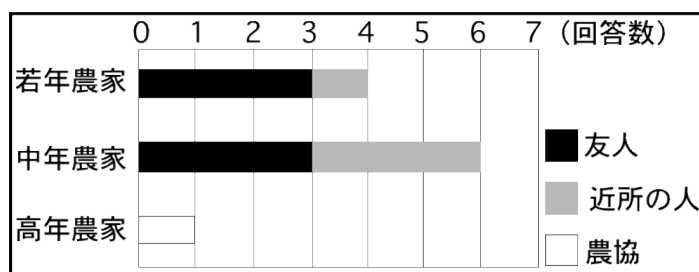


図 3-23 農家の年齢分類毎にみた代替労働支援主体の種類

2) 代替労働支援主体の有無別の困ること

代替労働支援主体を「有り」と答えた農家には、その主体に農作業を頼んだ場合に困ることについての回答を得た。また、「無し」と答えた農家には、自分（同居する家族も含む）で農作業を行う場合に困ることについての回答を得た。有無それぞれの場合について困ることを表 3-24 に示す。

「有り」の場合に困ることとして、若年農家では代替労働支援主体の都合に関することが挙げられた。中年農家では代替労働支援主体の高齢化や都合に関すること、農作業に不慣れであることなどが挙げられた。

「無し」の場合に困ることとして、若年農家では自分の体を休められないこと、時間に余裕がなくなることが挙げられた。中年農家では農作業の遅れや、農地を減らすことも含めた体力的な不安が主に挙げられた。高年農家では農作業の継続が困難になるという不安が挙げられた。

表 3-24 代替労働支援主体の有無別の困ること

	代替労働主体有り	代替労働主体無し
若年農家	<ul style="list-style-type: none"> ・近所の人も兼業で忙しいので迷惑がかかってしまう ・自分の家の仕事を終わらせてから来るので時期が少し遅れる 	<ul style="list-style-type: none"> ・とくにない ・体を休める暇がない ・兼業農家なので仕事をあまり休めず困る
中年農家	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢化していること ・思うように来てくれない ・今の若い人達が全くやる気がない ・農作業に慣れていないので効率が良く無い 	<ul style="list-style-type: none"> ・減反してしまう ・農作業が遅れがちになる ・体の不具合 ・できないことが出たら減らす ・作業時間が長くなるので体の疲れが心配
高年農家	回答なし	<ul style="list-style-type: none"> ・いつまで続くかが心配

3) 労働支援主体としての必要性

以上から、地域外家族は血縁者であるため、農家にとって使いやすく重要な労働支援主体であると言える。また農家の年齢が上がる程、地域外家族の労働支援主体としての必要性が高くなると言える。

若年農家には代替労働支援主体として友人等がいるが、地域外家族は血縁者であるため、相手の都合を気にせず必要な時に労働力が得られる。

中年農家では、地域外家族は代替労働支援主体よりも若く、農作業に慣れており、必要な時にその労働力が得られるため、効率良く農作業を行なうことができ、体力の回復や耕作の継続が可能になる。

高年農家では、代替労働支援主体がほとんどおらず、農協に委託する以外にない。農家が自ら耕作を続けていくために、地域外家族は非常に必要性が高いと言える。

(2) 耕作を続ける上での必要性

1) 潜在的耕作放棄地の有無

農家の年齢分類毎にみた潜在的耕作放棄地の有無の割合を図 3-25 に示す。若年農家では、全体的に「有り」とする割合は低い。中年農家では、水田と果樹園の両方に「有り」とする農家が多く、割合では水田、果樹園ともに 60%程度と高い。高年農家では、水田に「有り」とする農家は 30%弱と比較的低いが、果樹園に「有り」とする農家が多く、割合も 80%強と最も高い。果樹園は農家の年齢が上がる程「有り」とする割合が高くなる。

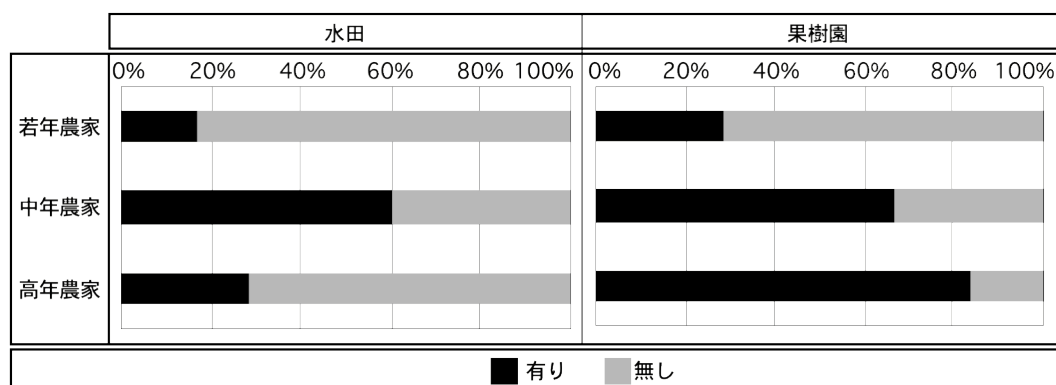


図 3-25 農家の年齢分類毎にみた潜在的耕作放棄地の有無の割合

2) 潜在的耕作放棄地の面積

対象地の全農地面積¹⁰⁾に占める潜在的耕作放棄地の面積¹¹⁾の割合を図 3-26 に示す。水田では 16%の約 2ha、果樹園では 13%の 3.5ha であり、大半は中年農家の農地である。

また、年齢分類ごとの農地面積に占める潜在的耕作放棄地の割合を図 3-27 に示す。全体的に農家の年齢が上がる程、潜在的耕作放棄地の面積が占める割合が高い。

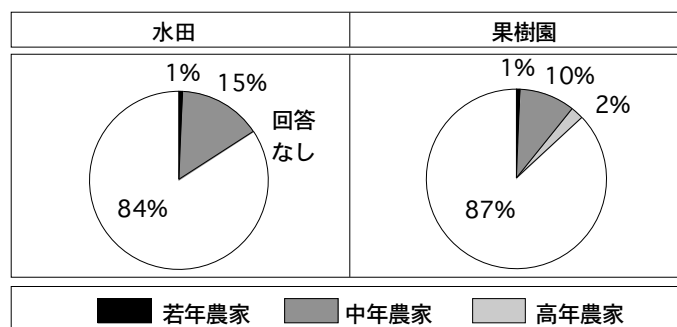


図 3-26 全農地面積に占める潜在的耕作放棄地の割合

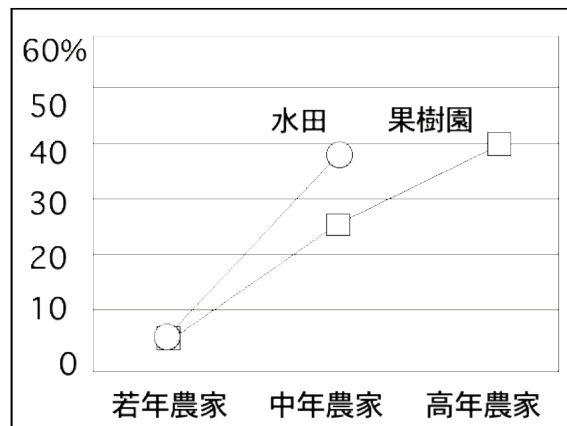


図 3-27 年齢分類毎の農地面積に占める潜在的耕作放棄地の割合

3) 耕作を続ける上での必要性

以上をまとめると、地域外家族の労働力は水田では特に中年農家において必要性が高く、果樹園では農家の年齢が上がる程、耕作を続ける上で必要性が高いと言える。

若年農家では、潜在的耕作放棄地の面積も小さく、耕作を続ける上では地域外家族の必要性を感じていないと言える。

中年農家では、潜在的耕作放棄地の面積も大きい。そのため耕作を続ける上での地域外家族の必要性が増している。

高年農家では、水田では潜在的耕作放棄地は少なく、地域外家族の必要性は低い。果樹園では潜在的耕作放棄地をもつ農家が多く、地域外家族の必要性が高い。

3—6 地域外家族による農作業の労働力

(1) 各年齢分類における労働力の特徴

以上の結果をもとに地域外家族による農作業の労働力についてまとめた。各年齢分類における労働力の特徴を述べる。

1) 若年農家 一水田の収穫時期に人手の必要な単純作業を行いやすくする一

若年農家は、50 歳代の兼業農家であり主に妻が農作業を行なう。体力は充分にあると考えられるが、農業以外にも活発なライフスタイルを持つことが伺える。また、水田にかける労働力が少ない。これは、この年代の農家から機械化が進んでいるためと考えられる。地域外家族には、技術は低いですが農作業を頼みやすいことから、主婦である妻の姉妹や、20 歳代で勤めを持った子が多い。彼らは、主に水田の収穫時期などの簡易な農作業を短時間で行なう。果樹園では、地域外家族が農作業を行なうことによる品質の低下が懸念されることもあって、農家が時間をかけてほとんどの農作業を行なっている。

つまり若年農家では、人手を必要とし短時間で終わらせる必要のある水田の収穫時期などの農作業を、地域外家族が農家の人数の少なさを補うことによって、効率良く行なっていると言える。

2) 中年農家 一農繁期に体力低下を補い、大きな面積の耕作を可能にする一

中年農家は、60 歳代で人数も多く男手もあり、大きな面積を効率良く耕作している。しかし一方で体力の低下が始まっている。若年農家と比較すれば、水田は自らの労働力がかかるが果樹園では地域外家族の労働力が増える。地域外家族は、主に 30 歳代の男性で勤めを持った子とその家族が多い。また、夫が定年退職をむかえ農業に関わるようになるため 50、60 歳代の夫のきょうだいも含まれ、1 戸当たりの地域外家族の人数が多い。

彼らは継続的に農作業を行なっていることに加え、農業を職業とする人が多い。そのため、技術が高く、水田、果樹園とも春と秋の農繁期の農作業を効率良く行なうことができる。さらに現在の居住地が市内であり、対象地での農作業を行いやすいと考えられる。

つまり中年農家では、農繁期の忙しい時期に、地域外家族が農家の体力の低下を補うことによって、大きな面積の耕作が可能になっていると言える。

3) 高年農家 一高齢者の耕作の継続を地域外家族が役割分担をして支える一

高年農家の多くは、70歳代の主に男性が一人で農業を行っており、人数は少なく体力も低下している。農地の面積が小さく、水田はほぼ自家用であると考えられ、自らの労働力でまかなっている。逆に販売目的で耕作する果樹園は地域外家族の労働力によるところが大きい。地域外家族は、40、50歳代の勤めを持った子とその家族や、妻のきょうだいが多く、1戸当たりの人数が少ない。

彼らは農作業の要領を得ていると考えられ、一年間を通して多くの農作業を行なっているが、農家の低下した労働力を少人数で補うため、役割分担を行なっている。地域外家族がいなければ農協に農作業を委託するしかなく、地域外家族は農家が耕作を継続していくために必要不可欠な存在であると言える。

つまり高年農家では、面積は小規模ではあるが高齢者による耕作の継続を、地域外家族が役割分担をして年間を通して支えていると言える。

(2) 地域外家族による労働力の全体的な傾向

1) 農家の年齢が上がるほど高まる地域外家族の必要性

農家の年齢が上がる程に、①農作業における地域外家族の技術が次第に高くなっていくこと、②家族・親類以外の代替労働支援主体が少なくなり、家族・親類であることの重要性が高くなっていくことが明らかになった。特に多くの労働力が必要となる果樹園でこれらの傾向が強いと言える。このことから、長期的に「居住地の変更を伴わない移動」をする地域外家族を農作業に取り込んでいることで結果的に耕作放棄を防ぎ農地を利用管理していることが明らかになった。

2) 女系のネットワークへの依存

若年農家においては妻の姉妹、高年農家においても妻のきょうだいが地域外家族として農家の農作業を支えている女系のネットワークへ依存していることが明らかになった。

3-7 まとめ

(1) 結果の要約

本章では、長野県長野市信更地区赤田区において、農家と地域外家族について年齢分類を行ない、農家の年齢分類ごとに地域外家族の労働力の特徴について分析をおこなった。結果は以下の通りである。

- ①農家と地域外家族の年齢分類を行い、例えば、若年農家は妻が一人で農業を行い、そのきょうだいが地域外家族として手伝っていることなど、農家と地域外家族の関係を明らかにした。
- ②農家の年齢分類ごとに水田と果樹園の単位面積当たりの労働力や単位面積あたりの平均日数、作業項目別の単位面積当たりの労働力を分析し、農家と地域外家族の労働力がどのように配分されているのかその特徴を明らかにした。
- ③量と質の両面から農家による満足度の評価を行い、農家の年齢分類ごとの地域外家族の労働力への意識を明らかにした。
- ④地域外家族がない場合を仮定し、労働支援主体としての必要性和耕作を続ける上での必要性を明らかにした。
- ⑤農家と地域外家族の労働が相互の年齢分類の関係において、農家の労働力を補い地域外家族が農作業を支えていることを明らかにした。具体的には次の通りである。若年農家では、水田の収穫時期に人手の必要な単純作業を地域外家族が行いやすくしている。中年農家では、地域外家族が体力低下を補い農繁期にも大きな面積の耕作を可能にしている。高年農家では地域外家族が高齢者の耕作の継続を支えている。これらから農家が高齢化するほど、地域外家族の農作業の技術が高まり、他の代替労働支援主体が少なくなり地域外家族の必要性が高まることが明らかになった。また、地域外家族による労働支援は女系のネットワークに依存していることが明らかになった。

3-8 仮説の潜在的可能性の検証

(1) これまでの成果の整理

中山間地域における集落環境の利用管理の実態を把握するために、まず、第2章では、集落社会による共同の維持管理に着目した。長野県長野市の山間部において、共同の維持管理の実態を明らかにし、その差異がどのような要因によって影響を受けるかを調査分析した。また、共同の維持管理の簡略化の傾向を把握した。これによって、集落社会による共同の維持管理は、集落社会の下部組織を維持できないと共同の維持管理は道路全般、水路、集会所・公民館、防火施設、神社の清掃・草刈り程度となり、集落の立地する地形によってはさらに共同の維持管理が簡略化されると考えられた。

一方で、第3章では、帰省する家族・親類を含めた家族社会による農地の利用管理に着目した。長野県長野市信更地区赤田区において、農地の利用管理の実態として、帰省する地域外家族による農作業の労働力について農家の年齢分類ごとの特徴を調査分析した。農家が高齢化するほどに帰省する家族・親類が農作業の技術を習得していき、貴重な労働力として特に果樹園など手作業が多い労働の場合には重要な役割を果たしていることが明らかになった。また、女系の家族・親類のネットワークに依存する傾向が強いことも明らかになった。このように、地域外の住まう家族・親類が農繁期などに帰省することにより、農地の利用管理にかかわっている実態が明らかになった。

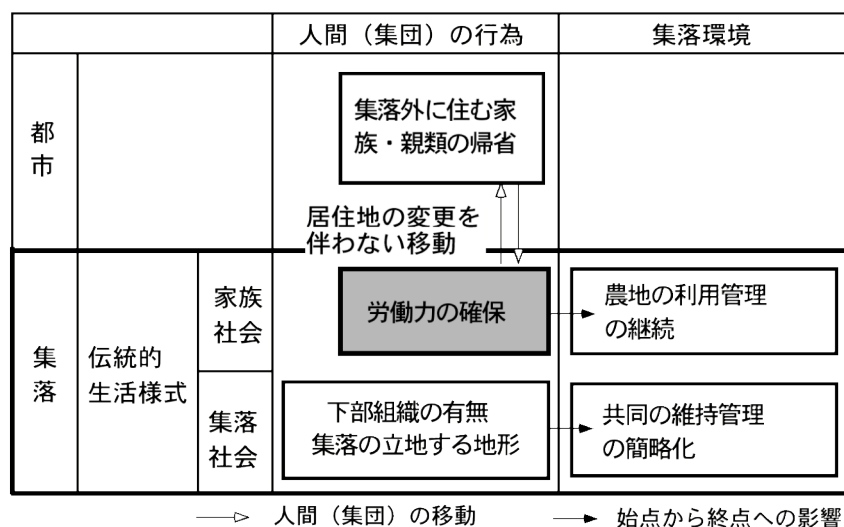


図 3-28 2章と3章の成果の整理

(2) 仮説の潜在的可能性の検証

中心の都市から概ね 30km 圏内に位置する中山間地域においては、ますます高齢化が想定できるので、以上の実態把握からは、農地の利用管理を続けて行くためには、帰省する家族・親類が農地の利用管理を支援する担い手になり得るといふ潜在的可能性が高いといえる。

つまり、設定した『帰省する家族・親類は集落環境の利用管理の担い手になり得る』という仮説は、農地という私用空間の利用管理において検証できた。

<補注>

- 1) 赤田区の農家である I 氏へのヒアリング(2002年4月1日)と、JA 長野中央会(1998)を参考に対象地で行なう農作業を設定した。水田に対して「田起こし」「田植え」「肥料散布」「農薬散布」「草刈り」「刈入れ」「脱穀」、果樹園に対して「剪定」「摘花・摘果」「肥料散布」「農薬散布」「草刈り」「葉摘み・玉回し」「収穫」の作業内容を設定した。
- 2) 地域外家族の労働力が農家の低下した労働力を補っているので、農家が農作業を主に行う労働主体とすると、地域外家族は農家の農作業を支援する労働支援主体であると言える。
- 3) 地域外家族は戸単位ではなく、個人を単位として年齢分類をしている。
- 4) 調査の時点では地域外家族の居住地には、市内、市外県内、首都圏があったが、首都圏は9人と少なかったので、市外と同じ扱いにした。
- 5) 春の農作業とは、水田の「田起こし」「田植え」、果樹園の「剪定」「摘花・摘果」を指す。秋の農作業とは、水田の「刈入れ」「脱穀」、果樹園の「葉摘み・玉回し」「収穫」を指す。
- 6) アンケート調査では、「手伝いの人数や日数など、手伝いの量は足りていると思いますか」という質問を行なった。「非常に満足」に+1.0、「どちらかという満足」に+0.5、「どちらでもない」に 0、「どちらかという不満」に-0.5、「非常に不満」に-1.0の数値を与え、平均値をとった。
- 7) アンケート調査では、「手伝ってくれる人たちに、今よりも多く手伝いに来て欲しいと思いますか」という質問を行なった。
- 8) アンケート調査では、「手伝ってくれる人たちの農作業の仕事振りに満足していますか」という質問を行なった。
- 9) 代替の労働支援主体に関しては、「もし、あなたの親類による農作業の手伝いが無かったら、親類以外の誰かに手伝いを頼みますか」という質問をおこなった。また、潜在的耕作放棄地に関しては、「もし、あなたの親類による農作業の手伝いが無かったら、あなたは耕作する農地を縮小しますか」という質問を行なった。
- 10) この面積は、アンケートの回答を得た 51 戸の農家の農地面積に関する回答から得た。
- 11) 「潜在的耕作放棄地有り」と答えた農家のうち、面積については若年農家が全戸から、中年農家が水田について 6 回答、果樹園について 9 回答、高年農家が果樹園について 4 回答が得られた。水田については回答が得られなかった。面積を答え

なかった農家の回答は無記入が 3 回答、「今はまだ分からない」とするものが 5 回答である。

<参考引用文献>

(1)後藤春彦、三宅諭、村上佳代、山崎義人「都市と農村を複眼的に眺める視座」、2001年度日本建築学会大会（関東）研究懇談会資料・都市と田園のランドデザイン-21世紀都市・田園論、p5～p12、2001.9

(2)細田祥子「中山間地域における地域外家族による農作業の労働力の意義 ～都市と農村をまたぐ家族像の展望」早稲田大学修士論文 2003.2

(3)JA 長野中央会「農業経営指標」1998